

統計にみる岐阜県内の近代「花街」

今 村 洋 一*

“Kagai” in Gifu Prefecture: Analysis of the Statistics from the Meiji Period
to the Early Showa Period

Yoichi IMAMURA

1. はじめに

1.1 背景と目的

本稿は愛知県を対象とした拙稿¹⁾に続き、岐阜県を対象として、明治～昭和初期の統計から近代花街の一端を明らかにしようというものである。なお花街とは、料理屋（料亭）、待合茶屋、芸妓置屋が集積する都市の一角であり、芸妓の活動する遊興の場である。また、芸妓置屋や芸妓が所属し、業種間の取次ぎをおこなう検番も花街には欠かせない。

かつて全国各地にあったと言われる花街だが、その多くは既に消滅し、現在は30～40程度にまで減じている。本稿の対象である岐阜県内では、今や岐阜と高山の2都市にしか花街は存在しておらず、岐阜県内にかつてあった花街について窺い知ることは容易でない。そこで本研究では、国会図書館に所蔵されている明治～昭和初期の『岐阜県統計書』（岐阜県発行）に記載されている花街関連統計データを整理し、近代における岐阜県内の花街の盛衰を明らかにすることを目的としている。

1.2 花街関連統計の詳細

警察の取締対象となっていた4業種（料理屋、待合茶屋、芸妓置屋、芸妓）に関する統計を本研究の分析対象とする。『岐阜県統計書』においては、各年末時点での料理屋、待合茶屋、芸妓置屋の営業者数（軒数）、芸妓の人数が、警察取締営業者の欄において、原則、警察署の管内ごとに集計されている。ただし、年によっては4業種すべての統計が揃っていない場合もある。

本研究で扱うのは、国会図書館に所蔵されている明治から昭和初期にかけての『岐阜県統計書』であり、具体的には、明治15年（1882）～昭和15年（1940）である。ただし、この期間中で入手できない年次も多くあり、また統計書はあっても、ある業種は掲載されていないという年次もあるので、必ずしも連続的にデータがとれるわけではない。なお、

* 文化情報学部 文化情報学科

警察署の管内ごとに掲載されていたのは、明治41年（1908）以降の統計書であるので、本研究では主に、明治末期から昭和初期（戦前期）までの花街の盛衰を明らかにすることになる。

2. 岐阜県全域でみた花街関連統計

まず、料理屋、待合茶屋、芸妓置屋、芸妓について、岐阜県全域の総計の推移を見ていきたい。『岐阜県統計書』では、それぞれ総計が記載されているが、警察署管内ごとの数値を合計した値と齟齬がある場合は、警察署管内ごとの数値を合計した値を採用する⁽¹⁾。

2.1 料理屋数の推移（図1）

岐阜県内の料理屋数を把握できる最も古い『岐阜県統計書』は、明治15年（1882）のもので540軒となっている。これ以降は緩やかな増加傾向がみられ、明治25年（1892）に752軒となった後は減少に転じ、明治27年（1894）には447軒となった。その後は、再び増加傾向に転じ、断続的なデータながらも、明治末期から大正期にかけては1,000軒程度で推移していたと思われる。大正13年（1924）の1,246軒からは緩やかな増加傾向がみとれ、昭和9年（1934）に1,500軒で昭和初期のピークを迎えている。その後は減少傾向に転じ、昭和15年（1940）には1,056軒と明治末期の水準にまで戻っている。

2.2 待合茶屋数の推移（図1）

『岐阜県統計書』で、待合茶屋数の記載があるのは昭和元年（1926）以降である。昭和元年（1926）に137軒であった待合茶屋数は、増減の波はあるものの、昭和12年（1937）の212軒まで増加傾向がみられた。1,000軒を超えていた料理屋数に比べれば、待合茶屋数は少ないものの、愛知県よりも高い水準⁽²⁾で推移していたことから、昭和初期の岐阜県においては、待合茶屋という業種が比較的発達していたと思われる。

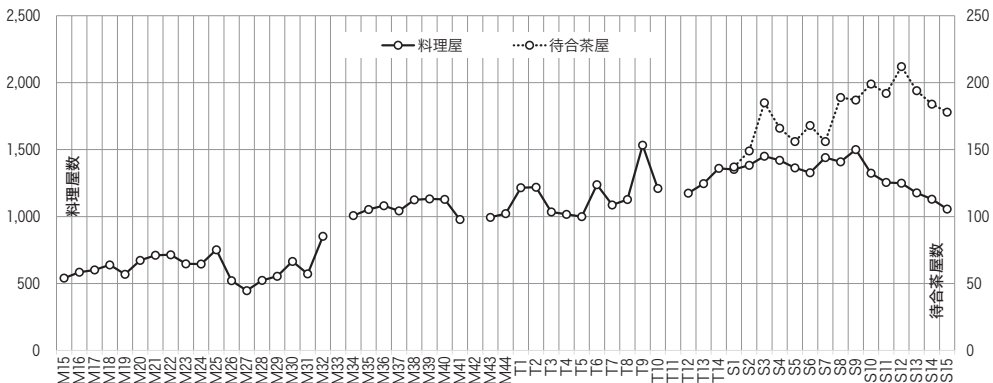


図1 岐阜県内の料理屋数及び待合茶屋数の推移

2.3 芸妓置屋数の推移（図2）

『岐阜県統計書』で、芸妓置屋数の記載があるのは大正14年（1925）以降である。大正

14年（1925）で523軒あり、その後、昭和初期にかけて横ばいから若干の増加傾向にあるが、500～700軒での推移である。なお、昭和3年（1928）の648軒と、昭和11年（1936）の682軒の2回のピークがある。

2.4 芸妓数の推移（図2）

岐阜県内の芸妓数を把握できる最も古い『岐阜県統計書』は、明治15年（1882）のもので222人となっている。その後は若干の増減はあるが緩やかな増加傾向がみられ、明治25年（1891）には349人となった後は減少に転じた。断続的なデータながらも、明治末期から大正期にかけては、着実な増加傾向がみられ、昭和2年（1927）には1,703人と、明治41年（1908）の612人から、約20年で3倍近くにまで増加している。その後数年は横ばいの時期となったが、昭和8年（1933）頃から急増し、昭和11年（1936）に2,641人で戦前のピークを迎えている。その後は減少傾向に転じ、昭和15年（1940）には1,836人となった。

芸妓置屋数と芸妓数のピークが昭和11年（1936）、待合茶屋数のピークが昭和12年（1937）であることから、戦前ではこの頃が岐阜県の花街の最盛期と言えよう。

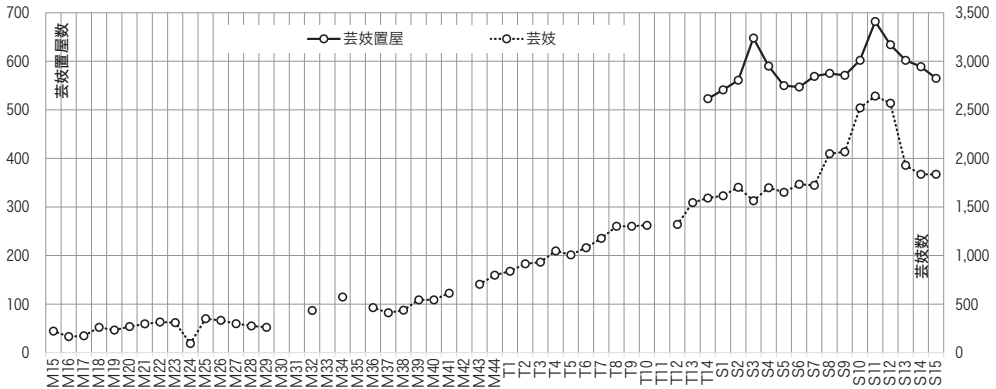


図2 岐阜県内の芸妓置屋数及び芸妓数の推移

3. 昭和初期における警察署管内ごとの花街関連統計比較

ここでは花街が最も賑わっていたと考えられる昭和初期、特に岐阜県の芸妓数がピークを迎えた昭和11年（1936）を対象として、各警察署の管内における花街関連4業種の営業者数を比較する（表1）。

料理屋に関しては、岐阜、大垣、多治見、中津、高山の5警察署管内で100軒を超えている。待合茶屋に関しては、岐阜署管内79軒、大垣署管内31軒と比較的大きな都市部を含む管内で多い。芸妓置屋に関しては、100軒を超えたのは岐阜署管内（180軒）のみだが、大垣、揖斐、多治見の3警察署管内では50軒を超えている。芸妓に関しては、岐阜署管内が935人、続いて大垣署管内が445人だが、笠松、揖斐、多治見の各警察署管内も100人以上となっている。現在も花街が残る高山市を含む高山署管内も85人で比較的多いほうである。各警察署管内の人口に差があるので、人口10万人当たりの芸妓数を見

てみると、大垣署管内が442.5人で最多であり、岐阜署管内が415.8人で続く。岐阜県全体の平均204.8人であるので、この2つの警察署管内ではその倍以上ということになる。この他に平均以上であるのは、揖斐(319.5人)、萩原(280.0人)、笠松(241.0人)、船津(214.8人)の4警察署管内である。

なお、料理屋数が100軒超かつ芸妓数が100人超であったのは、岐阜、大垣、多治見の3警察署管内である。このうち、岐阜署と大垣署は、城下町を起源とし、当時既に市制を施行していた岐阜市、大垣市を管内に有しており、都市部に比較的大きな花街があった⁽³⁾。他方、多治見署管内にはそのような都市部はないが、特に明治期以降、焼き物の産地として発展した地域であり、窯業集落から発達した商家町である多治見町や土岐津町などの街場があったことから、小規模な花街が自然発生していたと思われる。

表1 昭和11年(1936)の警察署管内別の花街関連4業種の営業者数

警察署	料理屋	待合茶屋	芸妓置屋	芸妓	10万人当たり芸妓数	人口	管轄区域
岐阜	174	79	180	935	415.8	224,883	岐阜市、稲葉郡
笠松	49	15	41	145	241.0	60,170	羽島郡
高須	42		13	36	130.6	27,563	海津郡
高田	28	9	7	45	134.6	33,440	養老郡
垂井	30	5	24	70	180.5	38,775	不破郡
大垣	132	31	82	445	442.5	100,567	大垣市、安八郡
揖斐	64	14	56	179	319.5	56,023	揖斐郡
北方	23		3	8	15.7	51,003	本巢郡
高富	17		2	1	2.3	44,129	山縣郡、武儀郡
八幡	52		21	44	77.3	56,894	郡上郡
関	58	2	25	65	87.4	74,369	武儀郡、加茂郡
金山	22		2	3	12.0	25,070	武儀郡、郡上郡、益田郡
太田		9	23	96	119.4	80,399	加茂郡
御嵩	30		8	38	111.7	34,019	可児郡
多治見	163	8	66	175	160.4	109,113	土岐郡、可児郡
中津	115		27	68	81.1	83,869	恵那郡
岩村	42		5	17	45.2	37,607	恵那郡
萩原	46	14	32	92	280.0	32,860	益田郡、大野郡
高山	106	6	27	85	125.7	67,615	高山市、大野郡、益田郡
船津	39		24	59	214.8	27,472	吉城郡
古川	23		14	35	148.0	23,652	吉城郡
総計	1,255	192	682	2,641	204.8	1,289,492	

(注) 管轄区域欄の各郡について、郡内のどの町村が管轄区域内にあったかは不明である。

4. 警察署管内ごとにみた花街関連統計の推移

4.1 対象とする警察署管内と花街関連統計

ここでは、花街関連統計の中でも、花街の隆盛を最もよく表していると考えられる芸妓置屋数と芸妓数に着目して、その推移を追ってみたい。芸妓置屋も芸妓も、大正14年(1925)より昭和15年(1940)まで、毎年末時点での各警察署管内の営業者数を把握できる。また、芸妓数に関しては、明治41年(1908)から断続的に把握できるので、その時点からの推移を追っていく。なお、ここでの対象は、芸妓数の多い、岐阜、笠松、大垣、揖斐、多治見の5警察署管内を対象とする⁽⁴⁾。さらに、岐阜市や大垣市と同様に、大正10年(1921)より待合茶屋、芸妓置屋、芸妓の営業許可地域が定められており、現在も花街が健在である高山市を含む高山署管内も対象に加える。

4.2 芸妓置屋数及び芸妓数の推移

(1) 岐阜署管内 (図3)

岐阜署管内では、芸妓置屋数は外れ値を除き、ほぼ横ばいの150軒で推移している。芸妓数に関しては明治末期より大正中頃まで増加傾向がみられ、明治41年(1908)の191人から大正9年(1920)には440人へと倍増している。大正13年(1924)には530人となり、その後はほぼ横ばいで推移し、昭和8年(1933)以降は急増して昭和11年(1936)に935人でピークを迎えている。この急激な増加は、昭和6年(1931)に貸座敷に芸妓の併置が許可された影響と思われるが、昭和11年(1936)の金津遊郭内の芸妓数は356人であった²⁾。しかし、その後は急減して、昭和15年(1940)には579人と昭和初頭の水準に戻っている。

なお、岐阜市内の花街は、伊奈波界限、高岩町・柳ヶ瀬界限、金津遊郭の3か所であり、特に高岩町・柳ヶ瀬界限が中心的な花街とされる³⁾。

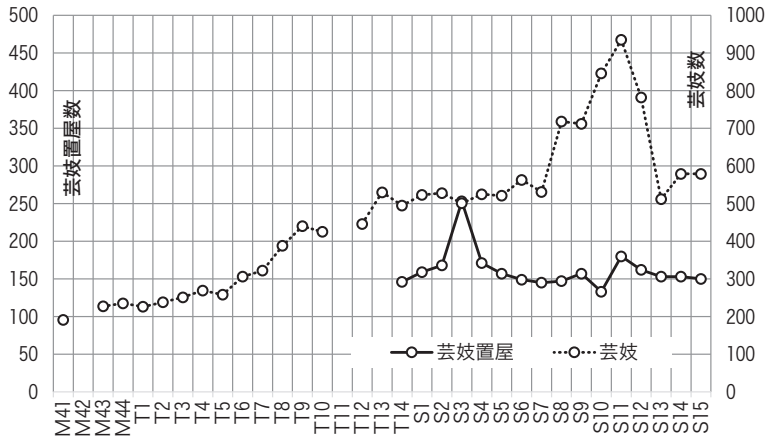


図3 岐阜署管内の芸妓置屋数及び芸妓数の推移

(注) 昭和3年(1928)の芸妓置屋数は、芸妓数にあまり変化がないのに反して、高めの外れ値となっているが、その要因は不明である。『岐阜県統計書』の誤記の可能性もある。

(2) 笠松署管内 (図4)

笠松署管内では、芸妓置屋数は外れ値を除き、ほぼ横ばいの30~40軒で推移している。芸妓数に関しては明治41年(1908)の44人から大正13年(1924)には145人と、3倍以上に増加しているが、特に大正後期からの増加が著しい。その後は増減を繰り返しながらも、およそ100~140人で推移し、昭和8年(1933)以降は増加して昭和12年(1937)に153人でピークを迎えている。その後は急減して、昭和15年(1940)には80人と大正中頃の水準に戻っている。

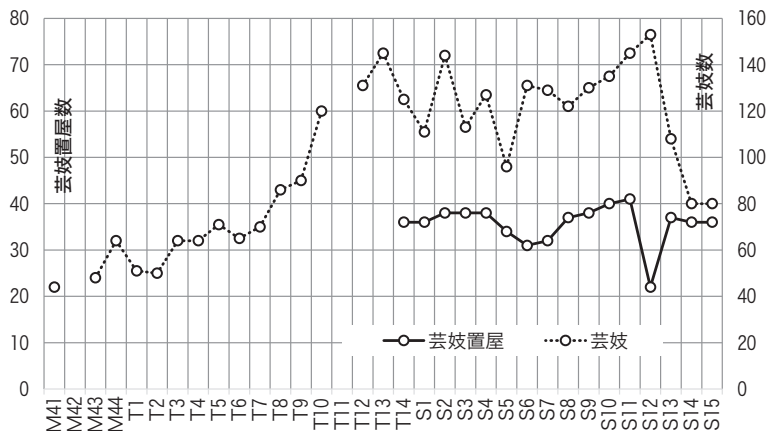


図4 笠松署管内の芸妓置屋数及び芸妓数の推移

(注) 昭和12年(1937)の芸妓置屋数は、芸妓数がピークとなるのに反して、低めの外れ値となっているが、その要因は不明である。『岐阜県統計書』の誤記の可能性もある。

(3) 大垣署管内 (図5)

大垣署管内では、芸妓置屋数は大正末期から昭和10年(1935)の85軒まで緩やかな増加傾向が見られ、その後はほぼ横ばいとなっている。芸妓数に関しては明治41年(1908)の101人から大正4年(1915)の190人へと10年かからず倍増し、その後、大正期は200人前後で推移するも、昭和期に入ると年々増加傾向が強くなり、昭和10年(1935)にはピークとなる450人に達している。なお、大垣署管内にも旭遊郭があったため、貸座敷に芸妓の併置が許可された影響もあったと思われる。その後は減少傾向に転じ、昭和15年(1940)には318人まで減少している。

なお、大垣市内の花街は、郭町と旭遊郭の2か所であり、また管内には墨俣町も著名であった(後の夜城園)。

(4) 揖斐署管内 (図6)

揖斐署管内では、芸妓置屋数は昭和期に入ると50~60軒で推移し、昭和12年(1937)の60軒をピークに減少して昭和15年(1940)には50軒を割り込み、大正末期の水準に戻っている。芸妓数に関しては明治末期から大正初頭にかけて増加傾向がみられたが、大正7年(1918)にかけていったん落ち込んでいる。その後、最初のピークとなる昭和4年(1929)の185人まで急増しており、約10年で約2.5倍になった。その後はいったん減少し

統計にみる岐阜県内の近代「花街」

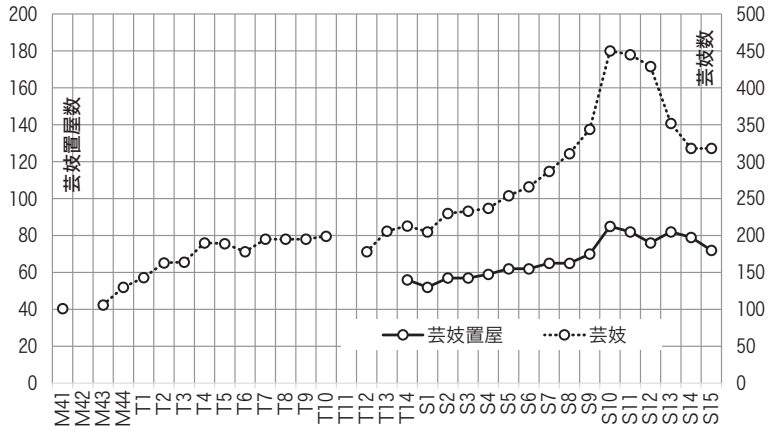


図5 大垣署管内の芸妓置屋数及び芸妓数の推移

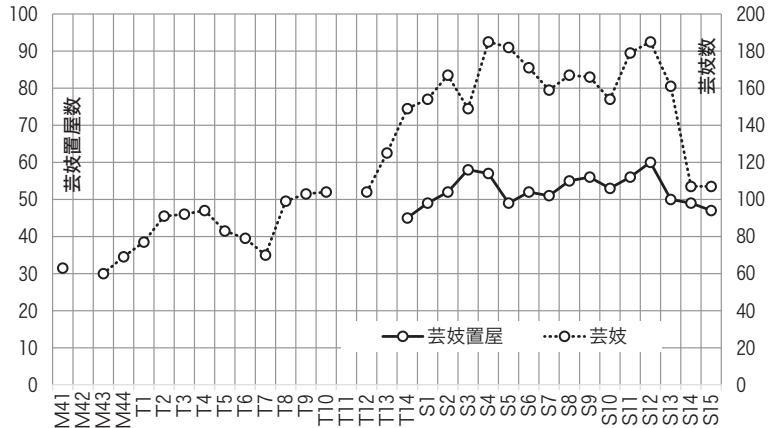


図6 揖斐署管内の芸妓置屋数及び芸妓数の推移

転じるが、昭和12年（1937）には185人で2度目のピークを迎える。その後は急減して、昭和15年（1940）には107人と大正中頃の水準に戻っている。

なお、既にみたように揖斐署管内は、昭和11年（1936）の人口10万人当たりの芸妓数が、大垣署管内、岐阜署管内に次ぐ319.5人と多く、当時は花街が隆盛であったことが窺える。管内では池野花街（池田町）が著名であった。

(5) 多治見署管内（図7）

多治見署管内では、芸妓置屋数は、大正末期から昭和初期にかけて、横ばいからやや減少傾向で推移している。しかし、一時的に増加に転じることがあり、昭和7年（1932）には57軒、昭和11年（1936）には66軒と、2回のピークが読み取れる。芸妓数に関しては明治41年（1908）の18人から倍増して大正中頃までは40～50人で推移していたが、大正12年（1923）には97人となり、さらに増加して昭和元年（1926）に最初のピークである156人に達する。翌年もほぼ同数であったが、その後に急減して昭和5年（1930）には半

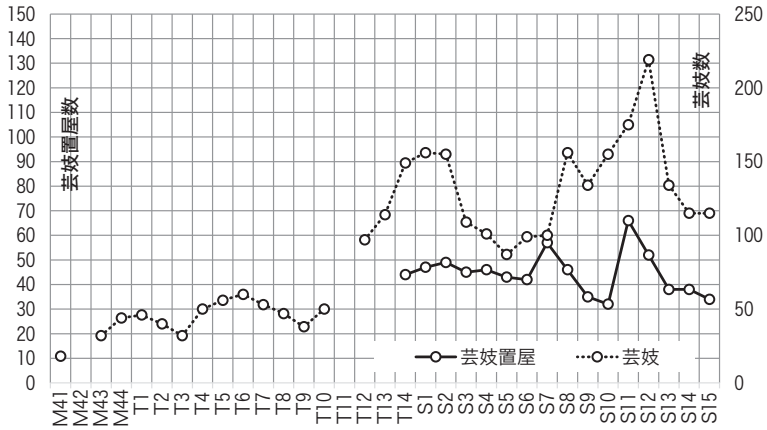


図7 多治見署管内の芸妓置屋数及び芸妓数の推移

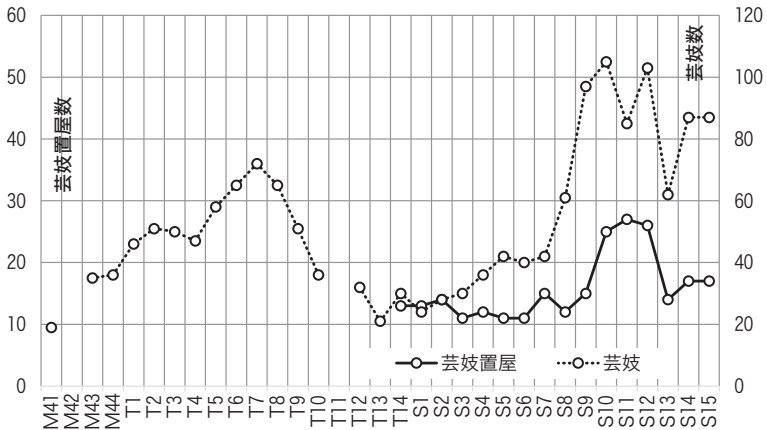


図8 高山署管内の芸妓置屋数及び芸妓数の推移

減近い87人まで落ち込んでいる。この急減は、昭和4～6年（1929～31）の昭和恐慌の影響が、この地域の主力産業である窯業に及び、芸妓数の減少というかたちで現れた可能性がある。ただ、この後は増加に転じて、昭和12年（1937）に2度目のピークとなる219人まで急増している。なお、多治見署管内にも西ヶ原遊郭（多治見町）があったため、貸座敷に芸妓の併置が許可された影響もあったと思われる。ピーク後は、急減して昭和15年（1940）には115人となっている。

(6) 高山署管内（図8）

高山署管内では、芸妓置屋数は大正末期から10数軒の水準で推移し、昭和10～12年（1935～37）の3か年だけ増加している。ピークは昭和11年（1936）の27軒である。芸妓数に関しては明治末期から大正中頃まで増加傾向がみられ、明治41年（1908）の19人から10年後の大正7年（1918）には72人と4倍近くにまでなった。しかし、その後は急減して大正13年（1924）には21人となっており、明治末期の水準まで落ち込んだことが分

かる。大正末期から昭和7年(1932)にかけては緩やかな増加傾向がみられたが、その後は急増して昭和10年(1935)に105人でピークを迎える。なお、高山署管内にも花岡遊郭があったため、貸座敷に芸妓の併置が許可された影響もあったと思われる。それ以降、増減を繰り返すも、昭和15年(1940)には87人で比較的高い水準を保っている。

なお、高山市内の花街は、旧大名田町の花岡遊郭周辺である。

5. まとめ

一般に、戦前における花街の最盛期は、昭和4年(1929)前後とされるが、『岐阜県統計書』の芸妓数のピークは昭和11年(1936)なので若干遅く、日中戦争開戦直前に最盛期を迎えていたと言える。芸妓数は明治末期からコンスタントに増加しており、20～30年をかけて、花街が拡大してきたと考えられる。なお、料理屋数は昭和9年(1934)のピーク後に漸減するものの、待合茶屋数は昭和12年(1937)にピークとなっていることから、昭和11年(1936)頃を岐阜県における花街の最盛期と言ってよい。

警察署管内ごとの統計からは、岐阜、大垣、高山といった都市部を含む管内だけでなく、笠松、揖斐、多治見の各管内では芸妓数が多く、在郷の街場でも花街が発達していたことが窺える。繊維産業や窯業などの近代産業の発展とともに街場が形成されたような場所では、花街の隆盛もその産業の景気動向に左右されたに違いない。大正末期から昭和初頭の好景気に呼応するように、どの警察署管内でもこの時期に芸妓数が増加している。なお、多治見署管内では昭和恐慌の影響と思われる落ち込みが確認されている。その後、昭和11年(1936)頃にかけて芸妓数が急増している警察署管内は、いずれも遊郭を有していることから、前述のように貸座敷に芸妓の併置が許可された影響もあったと考えられるが、それ以外の警察署管内でもこの頃の芸妓数の水準は高く、その後は共通して急減している。芸妓置屋数の推移については、緩やかな増加傾向、あるいは緩やかな減少傾向が見られる場合もあるが、概して言えば、どの管内でも大差なくほぼ横ばいであった。

警察署管内によって芸妓置屋数と芸妓数の推移は若干異なり、岐阜県内の花街の隆盛は一律ではないが、大正末期から昭和初頭にかけて花街が発展し、昭和11年(1936)頃にかけてもう一段の発展があり、その後、急速に元の水準に戻るといった大まかな傾向はどの管内にもあてはまることから、岐阜県内では、都市や地域による差が比較的小さかったと言えよう。

謝辞

本稿は、科学研究費補助金(課題番号16H04471)の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表したい。

補注

(1) 料理屋数については、大正4年(1915)、大正9年(1920)、大正10年(1921)、大正14年(1925)、昭和9年(1934)、昭和11年(1936)、昭和14年(1939)、待合茶屋数については、昭和8年(1933)、芸妓置屋数については、昭和13年(1938)、芸妓数については、大正6年(1917)、大正9年(1920)、大正14年(1925)、昭和12年(1937)、昭和13年(1938)におい

- て、警察署の管内ごとの数値を合計した値を採用している。
- (2) 参考引用文献1)によれば、愛知県の待合茶屋数はピークとなる大正後期であっても150軒程度で、昭和初期は減少傾向が続き、昭和6年(1931)以降は100軒を割り込んでいる。
- (3) 大正10年(1921)より、岐阜市街では、伊奈波界限、高岩町・柳ヶ瀬界限、金津遊郭の3か所、大垣市街では、郭町と旭遊郭の2か所が、待合茶屋、芸妓置屋、芸妓の営業許可地域と定められていた。
- (4) このうち、笠松署管内には、陣屋町であった笠松町や竹鼻街道沿いの商家町として栄えた竹ヶ鼻町などの街場が含まれる。

参考引用文献

- 1) 今村洋一(2021)「統計にみる愛知県内の近代「花街」」椋山女学園大学研究論集(社会科学篇)第52号, pp. 43-57
- 2) 森義一編(1936)『岐阜花街案内』岐阜花街案内社, p. 46
- 3) 今村洋一(2021)「近代岐阜における花街空間の実態」2021年度日本建築学会学術講演梗概集(都市計画), pp. 31-32